

Sanmi no Tsubone: Ashikaga Wife, Imperial Consort, Buddhist Devotee and Patron
三位局：足利将軍家の嫁、宮廷の局、そして仏教の信者・庇護者

本論は、三位局こと清原（古市）胤子（1583–1658）について、上流階級の寡婦の生活において仏教が現実にはどのような役割を果たしていたかという視点から考察したものである。胤子は初め足利将軍の長子に嫁し、夫の死後、後陽成天皇（在位：1586–1611）の宮中に召人として出仕、3人の男児をもうける。（彼らは3人とも後に門跡を継ぐ。）後陽成天皇崩御後、京都の北の岩倉に隠棲、広大な地所に雅な住居や付属の建物を建て、やがてそれらの内部を法華経の世界を象徴する彫刻で満たすようになった。彫刻はすべて、日蓮宗の信徒にして有名な彫刻師であった日護（1580–1649）の作である。三位局は、近隣の実相院及び大雲寺の庇護者となり、実相院には2巻の仏画の絵巻物を、大雲寺にはその秘仏の御影の本尊（代用の仏像）を寄贈した。三位局の死後、後水尾天皇は彼女の住居を正式に證光寺となし、続く1世紀半にわたって日蓮宗の僧が代々住職を務めた。19世紀後半、寺は廢墟となり、彫刻及び文書類は大雲寺と実相院に移管された。本論では、それらのうち残存する彫刻や記録文書、他の寺院に残っている日護の彫刻を通して、三位局が慈しんだ立体的な法華曼荼羅の姿を再現しようと試みた。

Visual Bilingualism and Mission Art: A Reconsideration of “Early Western-Style Painting” in Japan 視覚的バイリンガリズムと宣教美術：日本における「初期洋風画」再考

本論は、東洋と西洋の伝統が混淆した、甲論乙駁の初期洋風画（安土桃山期～江戸初期）のジャンルを批判的に分析することによって、異文化混淆芸術と「視覚的バイリンガリズム」のテーマについて考察したものである。分析対象として取り上げたのは、ヨーロッパの牧歌的風景の中にヨーロッパ貴族の人物像を配した六曲一双の屏風『洋人奏楽図』で、本論では、それが日本人の画家とヨーロッパの宣教師の協働になる美術作品であることをまず示し、次にキリスト教と仏教の図像学の観点から分析を試みた。無名の画家が、日本とヨーロッパの伝統を巧みに組み合わせ、宗教的にも美学的にも「バイリンガル」な美術を生み出した経緯を実証的に示した。

From Bodhidharma to Daruma: The Hidden Life of a Zen Patriarch

菩提達磨から達磨へ：禅の開祖の隠された生涯

禅の開祖とされる達磨大師は、禅画（水墨画）の画題として好まれてきた。しかし近世になるともう一つの達磨のイメージが急速に広まってくる。それが七転八起のダルマ人形で、それは最初、子どもの疱瘡除けのお守りであった。このように達磨は、子どもの守護神として、また福の神としても見なされるようになるのだが、同時に性的なイメージ——たとえば「達磨と遊女」の画題はポピュラー——や宿神のイメージさえ帯びるようになる。本論は、正統的な禅の開祖から江戸期の疱瘡神や福の神への達磨のイメージの変遷の仔細をたどろうとするものであり、その際、達磨は敵対者たちによって毒殺されたという禅宗の伝承が鍵になるのではないかと考えた。非業の死によって、達磨はその怨霊を鎮める必要があると考えられるようになり、そこから道祖神、疫病神、宿神といったイメージが派生してきたのだと思われる。聖徳太子や新羅明神の伝説や神話のようなものも、この変遷に絡んできた可能性がある。達磨を禅宗という常套的な文脈から引き離し、民間信仰や俗信のような文脈に置き直してみることによって、達磨が江戸文化において流行り神のような形で登場するようになった消息がよく理解できるようになると思われる。本論では最後に、もう一つのよく用いられる画題「葦の葉に乗り揚子江を渡る達磨」を、そうした観点から読み解いてみた。

Practical Frivolities: The Study of *Shamisen* among Girls of the Late Edo Townsman Class
実用的な浮薄：江戸後期の町人の娘たちにとっての三味線

江戸後期の町人の娘たちは楽器、特に三味線を習わされるのが一般であった。本論はそうした音楽教育がどのような動機に基づいていたのかを論じたものである。三味線は文化的に町人階級の音楽で、武士階級はこれを見下していたが、それは表向きのことにはすぎなかった。町人階級の親は音曲の才のある娘たちを藩主や上士の許に奉公に出すことを望み、そうした家に入った娘たちは、日常生活の中で武士階級の趣味と文化を吸収し、それによって階級間の溝を越えることができた。そうした娘たちは、町人階級内においてよりよい縁談が見込めるし、場合によっては藩邸の侍女として出仕したり、武士の内妻として身分を上昇させたりすることができた。江戸と英国ヴィクトリア朝期の若い女性たちを比較してみると、後者にとって音楽は純粋な「素養」であったが、江戸の若い女性たちにとってはキャリア・アップの手段という意味があったわけである。しかし明治に入ると、西洋音楽を学ぶ日本の若い女性たちは、音楽に対して英国の女性たちと似た動機を持つようになっていく。江戸時代の日本の女性たちは服従的でおとなしい生活を送っていたと思われがちだが、江戸の町人の娘たちは自助精神旺盛で、自分たちの未来を切り拓くために、階級全体として努力を惜しまなかったのである。

The “Masters of Sacred Dance” in Eastern Japan during the Edo Period 江戸時代における東日本の「神事舞太夫」

江戸時代（1600–1868）、東日本の神社で演じられた最も重要な神楽の幾つかは、田村八太夫の指揮下の「習合神道」の団体／社人によって監督されていた。田村は三社権現（浅草寺を守護する、江戸時代に最も人気のあった神仏習合の神社）の神主で、関東地方及びその近辺の神社で神楽の類を演じる数百の「神事舞太夫」の家を監督した。本論は、神社と神楽がその上演を監督する団体と、どのような歴史的・機能的関係を有していたかを分析したものである。

The Political Space of Meiji 22 (1889): The Promulgation of the Constitution and the Birth of the Nation

明治 22 (1889)年の政治空間：憲法公布と国民の創成

1889年2月11日の明治憲法の公布は、「公議輿論に基づく政治」という維新の理想の実現であると同時に、日本がこれによって近代国家になったことを西洋列強に示す役割を果たした。しかしこれまでの明治憲法の研究は、この憲法公布によって日本の政治空間が全面的に異化されたことを十分考慮してこなかったきらいがある。本論は、1889年が憲法発布を含む種々の点で画期をなす年である所以を解説したものである。日本の指導者の間には、憲法は新生日本の船出として祝されねばならぬという意識があり、明治22年には様々な儀式——2月11日の公布式典から11月3日の立太子の礼まで——が催され、劇的力学や細部に至るまで細心の注意が払われて挙行された。これら一連の儀式は、戊辰戦争に始まり、不平士族の反乱、自由民権運動といったそれまでの社会の不穏な動きに終止符を打つものとなった。社会的、政治的な抗争はようやく終息し、日本の近代の進展にとって画期的な一歩が踏み出されたという意義を持つ。日本人の国民意識は、このプロセスを経ることによって、ようやく根付いたと言えるのである。

The Making of a Mnemonic Space: Meiji Shrine Memorial Art Gallery 1912–1936 国民的記憶の空間の創出：明治神宮聖徳記念絵画館 1912-1936 年

本論は、明治神宮聖徳記念絵画館が国民的記憶のための空間として建てられたこと、建築自体が歴史の創出に関与したことを論じたものである。絵画館の目的は、明治天皇の事蹟を描いた 80 枚の絵画を通して明治時代の歴史を語ることであった。その建設には、立案から 1936 年の完成に至るまで 20 年以上を要し、その間絵画館の内外で様々な記念行事が催された。明治という時代の中の何を以て国民的記憶となすべきかは、絵画館の設立コンセプトに自明であったわけではない。この建築の長いプロセスの中でしだいに形をなしていったのである。歴史学者と画家たちは、絵画館に展示されることになる絵画に「真の歴史」が描かれるよう苦心した。歴史学者たちは歴史考証を行いながら画題を決めていった。彼らの大半が、文部省の『大日本維新資料』と宮内省の『明治天皇紀』という二つの史書の編纂に携わっていたことは重要である。画家たちにとっては、「真の歴史」表現のための「写実的スタイル」をどのようにするかが難題であった。また建築業者も、絵をどう配置するかに関わり、歴史ナラティブの完成に一役買っている。絵画館の建設に携わった者たちが抱いていた、このよう見てもらいたいという期待と、見学者たちが実際にどのように絵を受容したかという対比にも触れておいた。

Towards a Graphical Representation of Japanese Society in the Taishō Period: *Jiji* Manga in *Shinseinen*

大正時代の日本社会のグラフィック表現を目指して：『新青年』の時事漫画

日本のグラフィック表現は、その様々な形において、日本の近代化の各時期の歴史ナラティブを生き生きとさせる上で重要な役割を果たしてきた。日本のマンガは現在世界的な人気を博しているが、大正時代には時事漫画というグラフィック表現があった。多くの雑誌やジャーナルは、北澤楽天、岡本一平、下川凹天といった前代から活躍していた作家たちの民衆文化的伝統を汲みつつ、さらに多くの読者を惹きつけるために、風刺を利かせた社会的・政治的漫画によるグラフィック・リテラシーも取り入れ始めた。大正時代の歴史と社会のグラフィック表現を考察するために、本論は、特に『新青年』の1920年1月の創刊号から6月号までの6冊に収録されている時事漫画に焦点を当てた。『新青年』はこれまで探偵小説のジャンルの草分けとしての意義ばかりが論じられてきたが、時事漫画の視点から見ると、帝国主義と大正モダニズム、軍国主義と民主主義といった、時に相反するような様々な時代相の伝播媒体であったことが理解できる。堤寒三という比較的知られていない作家によって描かれた『新青年』の時事漫画は、大正時代という、日本の歴史の中でもきわめて議論の多い時代の一つに関する重要な時代文脈的情報を含んでいる。そこでは驚くほど様々な文化横断的な表現様式がぶつかり合い、近代という時代の複合的な像を浮かび上がらせている。

Romancing the Role Model: Florence Nightingale, *Shōjo* Manga, and the Literature of Self-Improvement

ロールモデルのロマンス化：フローレンス・ナイチンゲールと少女漫画と自己啓発文学

日本の印刷文化の中で、「学習マンガ」と呼ばれるジャンルは、教育と娯楽という一見馴染みの薄そうな領域の間でユニークな位置を占めている。「学習マンガ」のサブジャンルである伝記マンガはこの二つの領域にまたがり、戦前の修身の教科書及び偉大な人物の生涯と事蹟を伝える伝記小説と、少女マンガの語り口と読者の期待に応えるようなストーリー展開とを結合した。本論では、日本で何十年にもわたって教材の定番であったフローレンス・ナイチンゲール（1820–1910）を描いたマンガを取り上げ、ナイチンゲールの感動的な物語が、現代日本の読者の変化していく好みに合うようどのように脚色され描かれてきたかをたどった。

Smashing the Mirror of Yamato: Sakaguchi Ango, Decadence and a (Post-metaphysical) Buddhist Critique of Culture

大和の鏡を打ち砕く：坂口安吾、デカダンス、（ポスト観念論的な）仏教的文化批評

本論は、戦後直後の日本において最も影響力を持ち、議論を巻き起こした作家の一人である坂口安吾（1906–1955）の批評文学における幾つかの主要な哲学的主題を考察したものである。坂口安吾といえば、闇のカストリ文化や、田村泰次郎（1911–1983）、織田作之助（1913–1947）、太宰治（1909–1948）といった無頼派との連想が強く働くが、悪夢のような敗戦とそれに続く占領時代が始まったばかりの1946年に発表された、「墮落」「デカダンス」についての2つの挑発的な批評『墮落論』『続墮落論』によって名声を得た。しかし安吾が学生時代にサンスクリット語、パーリ語、チベット語の仏典を勉強していたこと、一時は僧侶になる抱負を持っていたことはそれほど知られていない。本論では、上記2作における「墮落」の概念を、主に安吾の新しい倫理的ビジョンという視点から分析してみた。安吾は、幻想と幻滅を体験した時代にあつて、人間の主体性を捉え直すことによって、人間倫理にラディカルな変革をもたらそうとした。しかしそのラディカルでモダニスト的な側面にもかかわらず、安吾の評論における「デカダンス」は、大乘仏教と禅宗の見地から光を当ててみるとき最もよく理解できる。さらに戦時中に書かれた「日本文化私論」（1942）と読み合わせてみると、『墮落論』『続墮落論』は、「ポスト観念論的な仏教的文化批評」、つまり、プラグマティズム、ヒューマニズム、非還元論的物理主義を奉じる文化批評の土台を築いた作品であると位置づけられよう。